

かなかった。75年に「倭人伝」を俳優座劇場で上演した。すでに、5年が過ぎていた。全編を役者が吹くトランプのテーマ曲が貫いた。この舞台には俳優小劇場の養成所のメンバーも参加していた。彼らも劇団に造反して

青年座や文学座、俳優座から執筆依頼があったのである。映画やテレビからもあった。青年座に書いたのが「肥前松浦兄妹心中」であった。この戯曲で岸田戯曲賞を頂いた。それからラジオドラマで「精霊流し」を書いた。それが今日まで継続

1カ月、休みなしの40ステージのロングランである。キャバレーがあった跡の劇場である。まだ独特の匂いが残っていた。天井は高く2階席まであった。これが伝説の舞台と言われる「修羅場にて候」である。

もう、この頃には劇団「空間演技」も演劇界で知られるようになっていた。入団志望者が相次いだ。演劇学校や老舗の劇団の養成所に入り、卒業したのはいいが劇団に残れなかった連中である。なにも老舗の劇団がない素質のある俳優を残すわけではない。危なくない連中を残すのである。反抗したり造反したりする連中は残さない。苦い経験があるからである。

演劇で存在を証明

1970(昭和45)年に、わたしはたった2人で劇団「空間演技」を結成した。公演には前に所属していた劇団三十人会の仲間も参加してくれた。第1作の「トンテントン」や「ひゅうらひゃあら」を喫茶店で上演するなどした。新宿ノアノアである。だれもが手弁当であった。楽屋は非常階段である。客は4、5人しかいなかった。だれもが寒さに震えていた。しかし、我々の存在を証明するには演劇し

た。「造反有理」という言葉があった時代である。きたろう、大竹まこと、風間杜夫、いまでは錚々たる連中である。この舞台が評判を取った。もう、亡くなったが演劇評論家の扇田昭彦さんは朝日新聞や週刊朝日に「久々に大型新人登場」と特集を組んでくれた。そして、

して上演され、わたしの代表作と言われている。すべて、祖母の言葉や肥前松浦の風景がバックにあった。故郷に育まれたのである。

それやこれやとやっている時にカフエアトロ新宿もりえーるで「1カ月のロングランをやるのか」との打診があった。

適、不適は4、5年もやっていれば自分でわかる。わかればやめて故郷へ帰る。ある地方都市でやめて帰った奴がホールの館長をやっているのには驚いた。「空間演技」に在籍していたのが売りだったという。わが劇団には2、3日もいたかどうか。(松浦市出身)